

その星座、いつからあった？(88星座100周年)

4000年前からのさそり座、2700年前に登場したオリオン座、200年前のねこ座

今年2022年は、国際天文学連合(IAU)が「星座を88個にする」提案をしてからちょうど100年にあたります。星座とその境界が最終決定したのは1931年ですが、ちょうど100年前に、いま使っている88星座が決められたと言っていいでしょう。

なぜ、星座を整理したのかといえば、その前に天文学者がそれぞれ星座を作ろうとして収拾がつかなくなったからです。そんな、現在使われていない星座には、けいききゅう(軽気球)座、マエナルスさん(山)座、ねこ座(図1)などがあります。ねこ座は1799年にフランスのランドが考えた星座です。

逆に88星座に残ったものでは、1756年にラカイユが定めた、ポンプ座、ぼうえんきょう座などがあります。みなみじゅうじ座は、1589年にオランダのブランシウスが、はと座とともに提案した星座で、それまではケンタウルス座の一部でした。



図1. 1825年のUrania's Mirrorに描かれたねこ座



図2. 前1100年の境界石レプリカ。さそり座が描かれている

一方、88星座の半分ほどは、2000年ほど前に古代ローマの天文学者クラウディオ・プトレマイオス(トレミー)が書籍「アルマゲスト」におさめたもので、ここには、しし座、おとめ座など黄道12星座のほか、オリオン座、ヘルクレス座、カシオペヤ座などおなじみの星座がズラリとならびます。俗にトレミーの48星座といいますが、アルゴ座が現在は、ほ、とも、りゅうこつの3つに分割されていますので、個数としては1減らして47星座または2増やして50星座分ですね。

なお、トレミーの48星座は、以前の星座を引き継いでいます。有名なのは古代ギリシアのアトスの「ファイノメナ」にある43星座ですが、さらに古い紀元前8世紀のホメロスの叙事詩「イリアス(ギリシア神話を書いた)」には、おおぐま座やオリオン座が登場します。

ただ、古代ギリシアより前に星座があったことは

わかっています。紀元前1100年ごろに作られた古代メソポタミアのグドウル(境界石)には、さそりが描かれています(図2)。このグドウルには太陽や月や金星も描かれており、周囲の図も今の星座と対応しているので、さそり座を表したと考えられます。さそり座が、3000年以上前には使われていたことがわかります。

このように、現在使われている星座には新旧があります。400年前に発明された顕微鏡や望遠鏡が星座になり、一方で2700年前のギリシア神話に登場するヘルクレスやオリオンが星座になっているのは、こういう理由があるわけです。

なお、もう星座は変更しないことになっているので、20世紀半ばに登場したテレビとか、電子レンジ、21世紀のスマホは星座になることはありません。未来の人が心変わりをしたり、地球から遠く離れた場所に旅行したら話は変わるかもしれませんが。



図3. オリオン座は科学館前でもスマホで撮影できた。

変化する星座

ところで、オリオン座は紀元前8世紀の「イリアス」に登場と書きましたが、あれほど目立つ星のならび(図3)が、星座になっていなかったわけがありませんね。

実は、オリオン座とほぼ同じ星を使った星座が、古代メソポタミアにあったのです。それは「アヌの真の羊飼い」といわれるもので、アヌというのは、星空を北の「エンリル」中程の「アヌ」南の「エア」とわけた中間です。これらはそれぞれ古代メソポタミアの神々の最高位で、神様の道に星座や星を配置したという形になります。

その羊飼いが、古代ギリシアでは狩人のオリオンになったというわけです。ほかにも、しし座やいて座など、多くの星座が古代メソポタミアから古代ギリシアに伝わって、変化しました。ただそれ以降はおおむね星座が変化せず、付け加わったのは、ご紹介した通りです。

復活した星座

どんな星座が使われてきたかは、その時代時代の星図や星表を見ればわかります。その中で、いったん消えて復活した星座があります。かみのけ座です。ギリシア神話に登場するベレニケのかみのけ座はトレミーの48星座ではありませんが、それ以前のヒッパルコスのかみのけ座を記していました。長らく無視されていたのが1536年のヴォベルの天球儀に再登場し、今に至っています。

なお本稿は近藤二郎著「星座神話の起源」、早水勉著の雑誌星ナビ連載「エーゲ海の風」を参考にしました。おもしろい話がいっぱいなので関心を持ったらぜひ読んでみて下さい。

渡部 義弥(科学館学芸員)